

分析報告書

-高校・入試・学修・キャリア&パーソナリティ属性が 内定獲得に与える影響-

要旨

2022 年度に入学した学生を対象に、出身高校属性、入試結果、学修状況、キャリア&パーソナリティ診断結果等を用いて、内定獲得に影響を与える要因をロジスティック回帰分析にて検証した。その結果、学修状況とキャリア診断ツールの受検の有無が内定獲得と関連があることなどを確認した。本報告書では、これらの結果をもとに入学後の学生支援の方向性を示した。

はじめに

本学では、入学者選抜の妥当性を検証する取り組みの一環として、入試区分ごとの入学者の特性が、入学後の学修成果や進路実績にどのように結びついているかを継続的に分析している。本報告書では、2022 年度に入学した学生を対象に、出身高校属性、本人属性・面接評価属性、学修属性、キャリア&パーソナリティ属性が、内定獲得にどのように影響しているかを検証した。加えて、3 年次内定獲得者と 4 年次内定獲得者の属性比較も行い、内定獲得に関連する要因を多角的に明らかにする。

1. データの特徴

1.1 全体データの特徴

分析で使用したデータの概要を示す。入試広報部より 2022 年度の入学者リスト、学務部学生課および教務課より在学生リスト（2025 年 4 月時点）、学務部就職支援課より内定・進学者リスト（2026 年 1 月時点）が提供された。入学者の入試区分を見ると、学校推薦系が 53.4%（公募制と指定校制を含む）、次いで、一般選抜が 25.8%、総合型が 17.2%、共テ利用が 3.0%、最後に留学生入試が 0.6%となった。その他の指標として、高校設置区分は公立が 60.9%、私立が 37.4%、その他 1.7%。高校学科区分は普通科が 72.8%、商業科を含めた専門等が 27.2%となった。次に、在学時の学修データでは、GPA 平均値が 3.07、AA の取得平均数が 28.0、A の取得平均数が 29.4 であった。最後に、就職データでは、75.3%が内定取得、内定未獲得が 24.7%であった。内定獲得の時期を見ると、内定取得者のうち、3

年次内定獲得（早期内定者）が 19%、4 年次内定獲得が 80%であった。また、キャリア診断ツールの受検の有無では、受検ありが 62.7%、受検なしは 37.3%であった。

1.2 総合型・学校推薦型（公募制）のデータの特徴

総合型と学校推薦型（公募制）の入学者を対象としたデータの概要を示す。いわゆる面接系入試に該当し、合否判定は書類点、面接点、小論文・講座点の 3 つの合計得点によって行われている。そのためこれらの入試を利用している学生と全体での比較を行うことは、どのような学生が利用しているのか、入学後はどのような成績を残しているのか、どのような就職活動の結果になっているかを把握することができる。まず、入試データでは、評定平均値が 3.42（全体比較▲0.12）となった。また、学生・教務による学修データでは、卒業認定単位平均取得数が 97.95（全体比較▲5.05）、AA の取得平均数が 24.68（全体比較▲3.4）であった。最後に、キャリア診断ツールの受検も 43.0%が受験となり、全体の受検率 62.7%と比較すると 19.7 ポイント低い結果となった。

2. 総合・公募（面接系選抜）の評価項目と配点

2.1 評価項目・配点の概要

総合型と学校推薦型（公募制）の評価項目と配点は、学生募集要項にも記載されている通り、面接点は 40 点満点、書類点は 40 点満点、小論文・講座は 20 点満点となり、これらの合計点で合否判定が行われている。

3. 分析内容・分析方法

3.1 分析の枠組み

今回の分析内容は、次の 5 つの分析を行い、目的変数である「内定獲得の有無」との関係性の高い変数を明らかにするものである。最初に各部署から提供されたデータを属性ごとに分析をおこなった。分析①として入学者の高校属性との関係性。分析②では入学者の本人属性・受験結果属性（総合型選抜・学校推薦型選抜<公募制>）との関係性。分析③では学修属性との関係性。分析④ではキャリア属性（キャリア診断結果とパーソナリティ診断結果を含む）との関係性。最後に、分析⑤として 3 年次の内定獲得者を早期内定獲得とし、3 年次に内定を獲得した学生の属性と 4 年次に獲得した学生の属性の比較をおこなった。

3.2 ロジスティック回帰分析と OR・AUC の解釈

分析①から⑤までの分析では、目的変数が「内定獲得の有無 (0/1)」の 2 値をとるため、ロジスティック回帰分析を使用した。これは 2 択の結果を各種データから予測する方法で、結果はオッズ比 (OR) で示される。OR は「内定を獲得する有利さの比率」を表しており、1 を基準として、大きいほど獲得しやすく、小さいほど獲得しにくいことを意味している。また、モデルの判別力の指標として AUC (Area Under the Curve) を使用している。AUC

が 0.5 に近いほど予測力が低く、0.9 以上で非常に優秀なモデルとされている。

4. 分析結果

4.1 出身高校属性と内定獲得の関係性（分析①）

出身高校属性を用いたロジスティック回帰分析の結果を示す。出身高校設置区分（公立・私立等）や学科区分（普通科・商業科等）、高校偏差値はいずれも内定獲得と有意な関連を示さなかった。一方、特定の高校課程区分の出身者は、非当該区分の出身者と比べて内定・進学獲得のオッズが約 1/4 と有意に低い結果となった（OR=0.24、 $p<.05$ ）。モデルの判別力は AUC=0.69 であり、中程度の水準であった。

4.2 本人属性・面接評価属性と内定獲得の関係性（分析②）

本人属性、面接評価属性を用いたロジスティック回帰分析の結果を示す。まず、モデル 1 では、女子学生は男子学生に比べて内定獲得のオッズが約 2.4 倍高い（OR=2.4、 $p<.01$ ）。また、高校評定平均は正の影響を示した（OR=1.24、 $+$ ）。書類点合計を投入したモデル 2（AUC=0.66）では、本人属性単独のモデル 1（AUC=0.61）よりも予測力がやや高い結果となった。

4.3 学修属性と内定獲得の関係性（分析③）

学修属性を用いたロジスティック回帰分析の結果を示す。GPA および総取得単位数はいずれも内定獲得と有意に正の関連を示した。成績が高く、修得単位数が多い学生ほど、内定を獲得するオッズが高い傾向が確認された。一方、ゼミ所属の有無は有意な関連を示さなかった。モデルの判別力は AUC=0.78 であり、4 つの属性を分析しているなかで、最も高い水準となった。

4.4 キャリア属性（キャリアとパーソナリティ）と内定獲得の関係性（分析④）

キャリア属性を用いたロジスティック回帰分析の結果を示す。キャリア属性に含まれているパーソナリティ診断結果の一つである「几帳面」（柔軟—几帳面の軸）が有意となり、几帳面の方向に 1SD 上がると内定獲得が 1.45 倍になることが示された（OR=1.45、 $p<.05$ ）。キャリア診断結果の社会人基礎力の一部を構成している「状況把握力（チームで働く力）」（OR=1.59、 $p<.05$ ）は内定獲得と有意な正の関連を示し、「規律性（チームで働く力）」（OR=1.44、 $+$ ）も正の影響を示唆した。一方、自己有能感（8 項目から構成された合成変数：主体性、実行力、計画力、課題発見、状況把握、働きかけ、創造力、規律性）、自己価値観（4 項目から構成された合成変数：リラックス、柔軟性、ストレスコントロール、傾聴力）、自己肯定感（自己価値観と自己有能感の 2 つの合成変数から構成されたもの）の各説明変数は有意な関連を示さなかった。なお、モデルの判別力は AUC=0.63~0.67 と中程度であった。

4.5 3年次内定・4年次内定獲得の比較（分析⑤）

分析①から分析④まで用いた4つの属性（高校属性、本人・面接評価属性、学修属性、キャリア属性）を統合して、目的変数を3年次内定獲得と4年次内定獲得に影響を与える説明変数を抽出することを目的としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、3年次内定獲得については、学修属性であるGPA（OR=3.6、 $p<.01$ ）およびキャリア診断ツールの受検（OR=3.6、 $p<.01$ ）がともに有意に正の関連を示した。一方、出身高校属性や本人属性・面接評価属性は有意ではなかった。次に、目的変数を4年次内定獲得にした場合、総取得単位数（OR=3.6、 $p<.01$ ）、キャリア診断ツールの受検（OR=2.2、 $p<.01$ ）、本人属性の女子学生（OR=1.9、 $\dagger$ ）が有意に正の影響を、出身高校属性の高校欠席日数（OR=0.7、 $\dagger$ ）が有意に負の影響を示した。両モデルともにAUCは0.82～0.83と高く、判別力は良好であった。なお、分析⑤の結果において共通していた変数に「キャリア診断ツールの受検」がある。そのため分析対象者を当該ツール受検者（ $n=277$ ）に限定し、受験者と非受験者を比較した。その結果、受検の有無と内定獲得をクロス集計したところ、受検ありの学生は受検なしの学生と比べて、3年次内定獲得が約3.3倍、4年次内定獲得が約2.3倍高い結果となった。

おわりに

本報告書では、①学修状況（GPA・総取得単位数）およびキャリア診断ツールの受検の有無が、内定獲得と強く関連すること、②出身高校属性については、特定の高校課程区分を除き内定獲得との明確な関連が見られないことを示した。今後は、本報告書で示した知見をもとに、入学後の学修支援およびキャリア形成支援の充実に向けて、学長室・IR委員会をはじめとする関係委員会・関係部署と連携した取り組みを進めていくことが求められる。